

指導と評価の 一体化

上川教育研修センター

「主体的・対話的で深い学びを
実現する学習指導の在り方」

～求められる資質と能力を育む指導と評価～

第18次研究 1年次



46

研究紀要

令和3年3月

研究紀要第 46 号の発刊にあたって

上川教育研修センター所長 福 家 尚

「予測困難な時代」「先行き不透明」などの言葉を、社会情勢を語るときによく耳にいたしますが、世界は今まさにその状況に置かれています。

この原稿を書いている令和 2 年の年末には、忘年会はおろか会食の自粛、帰省時期に交通機関の減便という「非日常」があり、一方で人々のマスク姿という「日常」があります。ウィルス自体は目には見えませんが、明確な脅威として存在し、予測できない未来に怯える毎日です。一年前の「年の瀬」に、誰がこの状況を予測できたでしょうか。

この一年、学校現場におきましては、休校措置や行事の延期・中止を繰り返し、教育活動に多くの支障がありました。見通しが立たない明日に向かって、子どもたちや先生方は懸念と不安を胸にしながら、必死にウィルスと戦う日々を送っています。大切な命を預かる学校現場は医療現場と同様に苦勞されており、皆様の御努力には本当に頭が下がります。

当センターにおきましても、当初休館や講座中止の措置を取りました。しかし、その後講座内容に修正や変更を加え、感染防止に努めながら研修講座を展開してまいりました。

各教育関係機関・団体が、授業を公開する集合・対面研修を中止してきた中で、唯一上川教育研修センターだけが、授業研究・研究協議を実現できたのは、講師の先生方と研究協力校や授業会場校の校長先生をはじめ職員の皆様のひとかたならぬ御理解と御協力があったからです。先生方の熱い思いと温かい御配慮に心から感謝と敬意をお伝え申し上げます。

その講座や研究協議の様子から強く感じていることがあります。先生方が、真剣なことはもちろんなのですが、話し合っている雰囲気を楽しそうで、皆生き生きと参加していることです。熱心に語り合う姿、質問している姿、そういう姿に、先生方の「学ぶことへの渴望」を強く感じています。

他から学び、自分の仕事に生かしていきたいという職業意識にも深く感銘を受けました。これは教師の本能であるのかもしれませんが。教師とは何と尊い職業なのでしょう。

教師として出会ってきた子どもたちはどんな時も明るさを忘れてはいませんでした。絶望の中でも笑顔を見せてくれることがありました。そんな子どもたちに私たち大人は幾度となく元気付けられ、勇気付けられてきたものです。

周りがどんなに辛く苦しい状況にあっても、子どもたちが過ごす学校を、教室を、楽しく居心地の良い場所にしていかなければなりません。それが私たちの務めです。

この度、研究事業として今年度取り組んできました理論研究と実践検証の考察及び第 18 次研究初年度の成果と課題をまとめ、研究紀要第 46 号を発刊することとなりました。子どもたちの豊かな学びのために、授業改善の参考資料として役立てていただければ幸いです。

最後に、これまで御指導・御助言を賜りました北海道教育庁上川教育局、旭川市教育委員会の皆様に篤くお礼申し上げ、発刊に当たっての御挨拶といたします。

(令和 3 年 3 月 31 日)

目 次

発刊に当たって

第Ⅰ章 研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

- 1 研究主題及び副主題
- 2 求める児童生徒像
- 3 研究の仮説
- 4 研究内容
- 5 研究の進め方
- 6 研究計画の概要
- 7 研究の全体構造

第Ⅱ章 研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

- 1 第18次研究のねらい
- 2 研究の具体

第Ⅲ章 研究員の授業実践

○鷹栖町立鷹栖中学校 第3学年 数学科・・・・・・・・・・ 15

授業者 村 越 恵 一 研究員

○旭川市立永山西小学校 第3学年 国語科・・・・・・・・・・ 33

授業者 小 林 豊 研究員

第Ⅳ章 研究協力校の授業実践

○旭川市立向陵小学校 第3学年 国語科・・・・・・・・・・ 43

授業者 上 野 真 吾 教 諭

研究部 元 島 由香利 教 諭

○上川町立上川中学校 第1学年 外国語科・・・・・・・・・・ 59

授業者 鏡 匡 助 教 諭

研究部 飯 村 喜代美 教 諭

第Ⅴ章 研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

あとがき

第Ⅰ章 研究の概要

- 1 研究主題及び副主題
- 2 求める児童生徒像
- 3 研究の仮説
- 4 研究内容
- 5 研究の進め方
- 6 研究計画の概要
- 7 研究の全体構造

1 研究主題及び副主題

**主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導の在り方
～求められる資質と能力を育む指導と評価～**

(1) 主題設定の理由

グローバル化の進展やA Iの急速な進化、絶え間ない技術革新など、さらに加速化・複雑化する社会の中、未来を切り拓く人材育成が求められている。

学校教育においては、全ての児童生徒が持続可能な社会の創り手として予測不可能な未来社会を自立的に生きていくために必要な資質・能力を育成することが求められている。その児童生徒に育成を目指すべき資質・能力は、次のように描くことができる。

- ・ 自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材を育成する。
- ・ 変化を前向きに受け止め、豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手として、予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するための資質・能力を一層確実に育成する。

このため、目指すところを社会と共有・連携していく「社会に開かれた教育課程」を実現するとともに、全ての児童生徒の力を最大限に引き出すため、教師が児童生徒一人ひとりの変容を見取りながら、それぞれの置かれている状況に応じて最適な学びが可能となるような環境づくりや授業の改善・充実を図ることが重要である。

こうした中、新しい学習指導要領の全面実施を迎え、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善の取組を活性化していくことは、児童生徒一人ひとりが「どのように学ぶか」という学びの質や深まりにつながるものとして重要であり、「カリキュラム・マネジメント」と連動して全ての教育活動の質の転換を図ることにつながる。また、この「カリキュラム・マネジメント」や「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善において、中核的な役割を担うのが指導と評価の一体化である。学習評価により児童生徒の学習成果を的確に捉え評価するのは当然のこと、教師が指導の改善を図るとともに、児童生徒自身が自らの学習を振り返り、次の学習に向かうことができるよう、学習評価の方法を工夫・改善していくことが必要となる。

これらの状況を踏まえ、上川教育研修センターでは、第17次研究において明らかにしてきた「深い学びを実現する学習指導の在り方～各教科における主体的・対話的な学びを通して～」についての成果を踏まえ、指導と評価の一体化を図る評価方法の工夫と改善を通して、児童生徒一人ひとりが主体的・対話的で深い学びを実現することを目指し、次のように研究を進めることとした。

(2) 研究主題のおさえ

① 研究主題～主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導の在り方

「主体的な学び」とは、学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返り、自分で自分の学びをコントロールできる状況であること。

「対話的な学び」とは、児童生徒同士の協議、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めることができる状況であること。

「深い学び」とは、児童生徒一人ひとりが、各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成し表したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう状況を示している。

「学習指導の在り方」で目指すことは、学習の内容と方法の両方を重視し、目標・指導・評価の一体化を図りながら、児童生徒の学びの過程を質的に高めていくことであり、幅広い授業改善の工夫が期待できる。

そして、こうした児童生徒の学びの基盤となるものは、学年・学級の支持的風土をはじめ、教室環境の整備や学習規律の確立など、組織的に学びの環境を整える日々の営みである。

② 副主題～求められる資質と能力を育む指導と評価

主体的・対話的で深い学びの視点での授業改善を一層充実させ、育成を目指す資質・能力を児童生徒に身に付けさせるためには、指導と評価の一体化が重要である。指導と評価の一体化を図るためには、児童生徒一人ひとりの学習の成立を促すための評価という視点を一層重視し、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習の指導や改善に生かしていくというサイクルを確立することが大切である。つまり、主体的・対話的で深い学びを評価という側面から切り込んでいくのである。指導と評価の一体化としての要素が加わることは、主体的・対話的で深い学びの視点での授業改善が一層充実したものになることが期待できる。

2 求める児童生徒像

各教科等において生きて働く「知識・技能」を習得し、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を高めながら、「主体的に学習に取り組む態度」を身に付けた児童生徒。

3 研究の仮説

目標と手立てが合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を設定するとともに、主体的・対話的で深い学びとなる指導計画や観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選、更には評価方法の工夫をすることにより、教師の指導改善、児童生徒の学習改善へとつなぐことができるであろう。

4 研究内容

指導と評価の一体化

(1) 単元目標の明確化

- ・ 指導事項の確認

- ・ 実態と他単元との関係

(2) 単元評価規準の設定

- ・ 単元構成の工夫

- ・ 学習課題の工夫

(3) 指導計画・評価計画

- ・ 一単位時間における評価規準
- ・ 評価時期・評価材料
- ・ 見通しと振り返り

- ・ 指導に生かす評価・記録に残す評価
- ・ 手立て
- ・ 対話の目的と手立て

(4) 観点ごとの総括

- ・ 見取り方

- ・ 判断

5 研究の進め方

- ◇ 教科を主体として研究を進める。
- ◇ 文献や実践資料に基づく理論研究を週 1 回の定例研究室会議及び夏季、冬季の集中研究室会議において進める。
- ◇ 各年次とも、上川教育研修センターの研究員及び、研究協力校の授業実践を基にして理論を検証し、研究紀要にまとめる。
- ◇ 研究の成果については、「センター研究発表会」において発表し、授業研究、研究協議で明らかにされた成果と課題を基に、研究紀要にまとめる。

6 研究計画の概要

令和 2 年度から令和 3 年度にわたる 2 か年において、単元の指導計画の作成及び本時の授業展開の工夫、学習評価の作成と見取り方を研究内容の柱として研究を推進する。

1 年次 令和 2 年度 授業実践（所員 2 名、研究協力校 2 校）

○研究員の授業実践

鷹栖町立鷹栖中学校 数学科（第 3 学年「式の計算」）

研究員 村越 恵一

旭川市立永山西小学校 国語科（第 3 学年「三年とうげ」）

研究員 小林 豊

○協力校の授業実践

旭川市立向陵小学校 国語科（第 3 学年「鳥になったきょうりゅうの話」）

教諭 元島 由香利・上野 真吾

上川町立上川中学校 外国語科（第 1 学年「オーストラリアの兄」）

教諭 飯村 喜代美・鏡 匡助

7 研究の全体構造

研 究 主 題

主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導の在り方

～求められる資質と能力を育む指導と評価～

求める児童生徒像

各教科等において生きて働く「知識・技能」を習得し、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を高めながら、「主体的に学習に取り組む態度」を身に付けた児童生徒。

研 究 の 仮 説

目標と手立てが合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を設定するとともに、主体的・対話的で深い学びとなる指導計画や観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選，更には評価方法の工夫をすることにより，教師の指導改善，児童生徒の学習改善へとつながることができるであろう。

研 究 内 容

指導と評価の一体化

(1) 単元目標の明確化

- ・ 指導事項の確認

- ・ 実態と他単元との関係

(2) 単元評価規準の設定

- ・ 単元構成の工夫

- ・ 学習課題の工夫

(3) 指導計画・評価計画

- ・ 一単位時間における評価規準
- ・ 評価時期・評価材料
- ・ 見通しと振り返り

- ・ 指導に生かす評価・記録に残す評価
- ・ 手立て
- ・ 対話の目的と手立て

(4) 観点ごとの総括

- ・ 見取り方

- ・ 判断

学びの基盤

支持的風土の醸成

教室環境の整備

学習規律の確立

第Ⅱ章 研 究 の 内 容

1 第 18 次研究のねらい

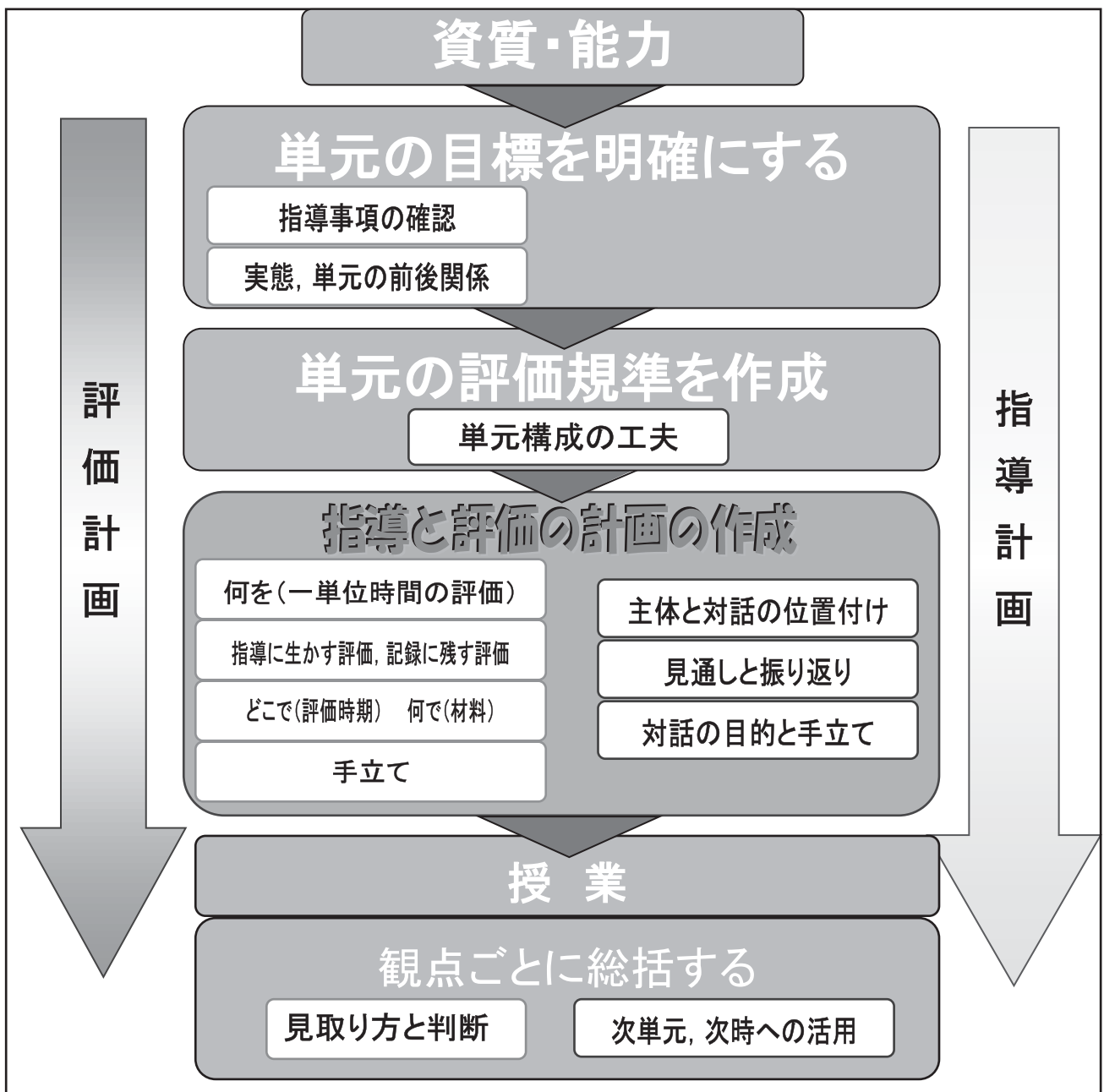
2 研 究 の 具 体

1 第18次研究のねらい

本研究は、児童生徒一人ひとりが、各教科等において生きて働く「知識・技能」を習得し、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を高めながら、「主体的に学習に取り組む態度」を身に付けることを目指している。そのため、当センターでは、「主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導の在り方」を研究主題に掲げ、第18次研究では、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うと同時に、評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、授業の改善と評価の改善を両輪として研究内容を次の2つに分け研究を進める。

- (1) 目標・課題・まとめ・評価が合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を見取る評価計画を作成すること。
- (2) 主体的・対話的で深い学びを充実させるための「単元構成の4つの視点」（後述）を意識しながら、主体的な学びや対話的な学びを単元で意図的に位置付け、指導計画を作成すること。

◆内容のまとまりごとの指導と評価の一体化のモデル◆



2 研究の具体

研究内容

指導と評価の一体化

新しい学習指導要領においては、児童生徒が「何を学ぶか」という指導内容を見直すとともに、「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」までを見据えた授業改善を進めることが求められている。

そのためには、目標と手立てが合致した単元の指導計画及び具体的な児童生徒の姿を見取る評価計画を作成することが大切である。指導計画では、主体的・対話的で深い学びを視点とした単元構成の工夫、評価計画では、評価する時期や場面の精選、評価方法の工夫を研究内容とすることとした。

(1) 指導計画

単元構成の工夫とは、主体的・対話的で深い学びを充実させるための「単元構成の4つの視点」を意識しながら、主体的な学びや対話的な学びを単元で意図的に位置付け、指導計画を作成することである。

単元構成の工夫

深い学びを実現させるためには、児童生徒が自ら思考して問い続ける学習過程を目指し、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、単元を構成する必要がある。

児童生徒が、次の4つの姿（知識を相互に関連付けて①より深く理解する姿、②情報を精査して考えを形成する姿、③問題を見出して解決策を考える姿、④思いや考えを基に創造する姿）を実現する学習を通して、深い学びを充実させることが大切である。

そこで、以下の4点を意識した単元構成を行う。

なお、一単元のみで下記の4点が全て網羅されるものではない。

【単元構成の4つの視点】

■既習内容や経験と関連付けた思考の促進を意識した単元構成

より深く理解する姿を目指し、児童生徒が既習の内容や経験などと関連付けて考えられる場面を設定するように単元を構成する

■児童生徒が思考して問い続ける過程の重視を意識した単元構成

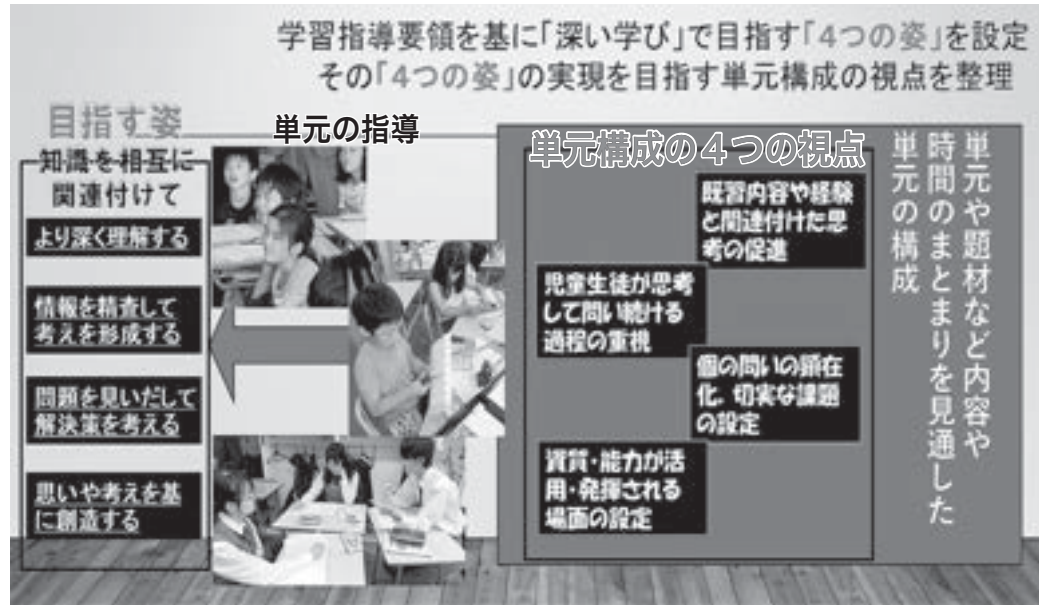
情報を精査して考えを形成する姿を目指し、児童生徒の意識に沿って、思考が連続するよう意図的に計画するように単元を構成する

■個の問いの顕在化、切実な課題の設定を意識した単元構成

問題を見出して解決策を考える姿を目指し、児童生徒の意識に沿った個の課題意識を高める場面を設定するように単元を構成する

■資質・能力が活用・発揮される場面の設定を意識した単元構成

思いや考えを基に創造する姿を目指し、単元を通して身に付けた力を活用する場面を設定するように単元を構成する



主体的・対話的な学びは、毎時間の授業改善の視点として有効である。そこで、深い学びをより充実させるためには、児童生徒の思考の流れや単位時間のつながりを考慮しながら、主体的な学びや対話的な学びが中心となる時間や場面を意図的に単元に位置付けることが大切である。

学習課題の工夫とは、児童生徒が見通しをもって課題を解決することができるよう学習課題を工夫することである。

見通しとは、児童生徒が問題意識から課題を設定し、課題解決に向けた方法や手順を見定めることである。

学習課題の工夫

児童生徒一人ひとりが、目標を理解し、学習への興味・関心を高め、主体的に課題解決に取り組むようにするためには、単に目標を示すのではなく、児童生徒が単元の学習で何を学ぶのか、どのような解決方法があるのかなどを見通すことができるようにする必要がある。

学習課題の設定に当たっては、課題意識を高める問題を提示した上で、次の点に配慮することが大切である。

- 学習の目標や内容を理解できる学習課題
- 学習への興味・関心や問題意識を高める学習課題
- 主体的に学ぶ意欲を高める学習課題
- 学習の見通しをもつことができる学習課題

見通し

本研究では、上記のような学習課題を発達の段階に応じて提示することにより、児童生徒の主体的な学びを促すことができるようにした。

また、児童生徒が見通しをもって課題を解決するためには、課題解決の方法や手順の確認が必要であることから、既習事項や生活経験を想起させ

たり、学習過程を確認させたりする学習活動を取り入れた。

このように、個人思考に入るまでに学習課題を理解させ、課題解決の方法や手順を確認する中で見通しをもたせることにより、児童生徒の主体的な学びが可能となる。

振り返りとは、児童生徒が学んだことについて自分自身の言葉で自己評価することである

振り返り

児童生徒が学習の終末において、何をどのように学んで、何ができるようになったのかを実感して次時への学習意欲を高めるためには、振り返りの時間を設定し、「学びの成果」や「解決の過程」を主体的に振り返らせることが必要である。

「学びの成果」の振り返りでは、その時間に学習したことで、何が分かり、何ができるようになったのかを自己評価させる。

「解決の過程」の振り返りでは、問題解決的な学習過程とその方法や手段を通して学びの成果を得るに至った自分自身の学習の足跡を自己評価させる。

学習の終末で行う学習過程には、次のようなものが考えられる。

【学習の終末で行う学習過程】

- ① 学習課題に対するまとめを行う。
- ② 練習問題に取り組む。
- ③ 個人思考の段階における自分の考えを見直し更新する。
- ④ 学びの成果を振り返る。
 - ・ 本時の学習の理解度を「4件法」等で表す。
 - ・ 本時の学習で分かったことを書く。
 - ・ 本時の学習で分からなかったことを書く。
 - ・ 本時の学習から新たな疑問を書く。
- ⑤ 解決の過程を振り返る。
 - ・ 本時の学習の解決の過程を振り返る。

→ 自己評価
||
振り返り

本研究では、④「学びの成果を振り返る」と⑤「解決の過程を振り返る」の内容について短時間で自己評価する。なお、⑤については、学習内容や児童生徒の発達の段階に応じて適宜行うものとする。

このように、1単位時間の終末の場面（教科の特性や単元の内容によってはその限りではない）で「学びの成果」や「解決の過程」を振り返らせることにより、主体的な学びが次時につながるものとなり、個の学びを豊かなものにすることができる。

対話の目的と手立てとは、物事の多面的で深い理解のために、対話を充実させる指導の方法である。

対話の目的

教師が対話の方向性を設定した後に考えることは、児童生徒に対話の論点を設定することである。

そのためにも、まず、児童生徒が「話したい」「相手からの情報を聞いて考えを広げたい」と思えるような論点が必要となる。そこで教師は、児童生徒の実態を把握し、それに合った対話する必然性のあるテーマを考えることが大切である。

例えば、算数科の「資料の調べ方」の学習において、平均値や最大値といった様々な考え方が出される問題を設定し、多様な考え方に触れる機会を設定する。「考えを吟味・検討する」という対話の方向性のもと、「どの代表値を用いて考えることが妥当なのか」を論点とすることが考えられる。

また、図画工作科の絵や立体、工作に表す活動において、制作途中で自分以外の作品についても対話する場面を設定する。そのことで、「改善点を見出すため」という対話の方向性のもと、「自分の作品主題に迫るために足りなかったこと」「更に作品をよく仕上げるためにできること」を論点とすることが考えられる。

このように、単元のねらいや本時の目標に沿った論点を示すことで自分の考えを広げたり深めたりし、目標に迫ることができる。

手立て

1 単位時間という時間的制約の中で、対話を充実させるためには、児童生徒が既存の知識等との比較や情報の関連付けを行う力を高めることが必要である。

そのためには、教師が児童生徒の必要感に応じて対話の場を設定したり、それぞれの考えを可視化したりすることが大切である。

教師は、本時のねらいや児童生徒に身に付けさせたい力に応じて、対話を柔軟に学習過程に組み入れる。

例えば、自分の考えを構築させるために、個人思考の途中で対話を取り入れることが考えられる。本時の課題に対し、自分の考えを構築できている状況に応じて、必要な情報を収集させたり、得られた情報を基に自分の考えを再構築させたりするなど、既存の知識等との比較を行う場を意図的に設定する。

さらに、集団思考後のまとめを考える場面や学習活動全体を振り返る場面で考えを統合するための対話を取り入れ、情報の関連付けを行わせることが考えられる。

なお、常に対話的活動を個人思考や集団思考の場面に限定するのではなく、その目的に応じて取捨選択を含めて柔軟に対応する。

また、自分の考えを表現したり、互いの考えを比較・検討したりするために、教師は、児童生徒の思考過程を可視化するなど、多様な手段で児童生徒の考えを表現させる。

例えば、思考ツールを活用して児童生徒の思考過程を可視化したり、考

えたことを付箋に書き出して構造的に整理させたりすることなどが考えられる。

このように、「場や形態の設定」や「互いの考えの可視化」を行うことによって、対話を充実させることができる。

本研究における対話は、単元のねらいや本時の目標を達成するために行うものである。児童生徒が互いの思いや考えを納得するまで伝え合い、分かち合おうとする過程を通して、自分の考えに自信をもったり、新たに考えが変わったり、加わったりするなどし、対話前と比べて、自分の考えが深まったり広がったりしたことを実感させたい。そのことが、単元のねらいや本時の目標の達成へとつながると考える。

(2) 評価計画

単元目標の明確化とは、指導事項を確認し、児童生徒の実態を把握し、単元の前後関係を考えることで、単元の目標をはっきりとさせることである。

指導事項の確認
児童生徒の実態
他単元との関係

単元（題材）の目標を設定する時には、その単元の中で児童生徒に身に付けさせる資質・能力を明確にさせることが大切である。

その際、まずは学習指導要領から押さえるべき指導事項を整理することが重要である。次に、その指導事項に対する児童生徒の実態を確認する。更には、本単元（題材）における事前・事後の単元（題材）とのつながりも押さえておくことが求められる。

このように、指導事項、児童生徒の実態、実施単元の事前・事後を教師が把握して目標を設定することで、その目標は児童生徒にとって、必要な資質・能力を反映したものに成りうると考える。そのように設定した目標は、その単元におけるゴールであり、そこに児童生徒が到達できるように学習を計画していく。そこから、「この時点では、これぐらいの力を身に付けておくことが求められる」と逆算的に考えていく。このように、目標の達成に向けて通過しておかなければならないチェックポイントを設定していくことが、一単位時間における評価計画を立てていくことにつながっていくと考える。

単元評価規準の設定、評価計画の作成とは、単元構成の4つの視点から構成された指導計画を基に、何を（1単位時間の評価）どこで（評価時期）どのように（評価材料）評価し、規準に達しない児童生徒への手立てをどうするか考えることである。

一単位時間における評価規準

児童生徒一人ひとりに学習の確実な定着を図るためには、学習指導要領に示された目標に準拠した評価を焦点化して実施することが必要である。そのため、1単位時間の評価の観点を精選し、評価を行うことで、児童生徒の学習改善に生かすことが大切である。

また、学習評価は、日々の授業の中で児童生徒の学習状況を適宜把握し

指導に生かす評価 記録に残す評価	て指導の改善に生かすことが重要であり，観点別の学習状況については，毎回の授業ではなく単元や題材など内容や時間のまとまりごとに，それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど，その場面を精選することが重要である。 そこで，単元の評価計画においては，それぞれの時間の目標や内容に応じて，観点別評価（「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」）をバランスよく位置付けることが大切である。 さらに，評価を焦点化するためのもう一つの手立てとして，本研究では，「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」のどちらを目的とするのかを明らかにすることとした。「指導に生かす評価」は，観察や発言，ワークシート等への記述内容などを基に，個に応じた指導や授業改善に生かすことを目的として日常的に行うものである。一方「記録に残す評価」は，ノートや作品など，全ての児童生徒から集める成果物を参考にしながら，主として総括的評価の資料とすることを目的として行うものである。 また，教科によっては，時間や学習活動のまとまりを考え，まとまりの最後の時間に記録に残す評価を行い，そこに至るまでの過程においては，指導に生かす評価を行って授業を改善するものである。
評価時期 評価材料	2つの視点から評価を捉えることで，評価の観点や評価の回数を精選し，効果的・効率的な評価となることを目指した。なお，評価の方法については，ノートやワークシート，作品など，授業後に教師が確認しながら評価できるものの他，発言の様子をはじめとする授業中の学習状況を見取りながら評価するものなど，目的に応じた方法を選択して行うこととした。 このように，観点別評価を行うとともに，「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」のどちらを目的とするのかを明確にすることにより，効果的・効率的な評価を行うことができる。
手立て	そして，評価規準に表されたものを「おおむね満足できる」状況として捉え，それを踏まえて支援を要する児童生徒への手立てを具体的に考えておくことで，学習意欲の向上を図り，資質・能力の育成に生かすことができると考える。

◆指導に生かす評価・記録に残す評価」の視点での実践例

※小学校第3学年 国語科「鳥になったきょうりゅうの話」 第Ⅳ章 研究協力校の授業実践 pp.43～58

- ・評価計画を作成する上で、「指導に生かす評価」と「記録に残す評価」の2つに分け、目的に応じた無理のない評価ができることを目指した。
- ・「指導に生かす評価」の際は、主にその時間ごとの目標に対し、「努力を要する」と考えられる児童を中心に観察し、個に応じた指導や授業改善につなげていくことを意識した。
- ・「記録に残す評価」の際は、毎時間記入してきたワークシートへの振り返りを材料とした。そのため単元の最後の時間を記録の時間として設定した。読書に対する考えの変容を教師だけでなく、児童自身も実感することができ、達成感を得る姿が見られた。

【本單元における評価計画の概略図】

時	本時の目標	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
①	学習の見通しをもつことができる。	指導		記録
②	教材文の内容を理解し、感想をもつ。		指導	変容や調整力を見取るために
③	考えや感じたことを共有して、一人一人の感じ方に違いがあることに気付くことができる。			
④	幅広く本に触れて、自分が読む1冊を決めて読むことができる。	指導		指導
⑤	選んだ本から友達に伝える内容を考えることができる。		指導	
⑥				
⑦	本を読んで感じたことを共有し、一人一人の感じ方の違いに気付くことができる。	記録	記録	記録

「指導と記録」というように、それぞれの役割を意識して評価計画を作成することにより、授業改善を行いながら目標に到達させていくという「指導と評価の一体化」を具現化することができた。

- ※ 記録に残す評価は、主に「内容のまとまりごと」に行うものと考えている。本単元は7時間という小単元ということと各学習活動のつながりを考慮し、最終場面での児童の姿を記録に残すことと判断した。
- ※ 主体的に取り組む態度については、学習計画に対して見通しをもつ力をおさえるために1時間目にも記録に残す評価を設定している。また、単元前後における変容を実感させることも目的としている。

◆「指導に生かす評価・記録に残す評価」の視点での実践例

※中学校第1学年 英語科「オーストラリアの兄」 第四章 研究協力校の授業実践 pp. 59～70

評価のための「記録」に
労力を割かれる等の学習評
価の課題を踏まえ、単元の
指導計画・評価計画を内容
ごとにまとまりを設定し、
「指導に生かす評価（個に
応じた指導や授業改善）」を
行いながら、学習のまとま
りの最後や単元末等で「記
録に残す評価」を行った。



「指導に生かす評価」

7 時間目～電話表現。

8 時間目～次時に向けてのプレ。

7 時間目、8 時間目、9 時間目
をひとまとめにした。

「記録に残す評価」9 時間目～パフォーマンステスト。
電話にて、ALT に質問する。（話す活動[やり取り]）

Unit6 復習・Daily Scene 2「電話の会話」 ○教科書に載っている電話の表現を練習する。 ○「マ」を練習する。 ・個人・グループで質問の表現を考えさせる。 ・T2 とのやりとりの中で、校長先生の情報をたくさん聞き出す。 ・聞いた情報を元に、ウェルカムパーティーの最終準備を計画する。 ○ALT のウェルカムパーティーを計画するために、電話を使用してマーク先生（現 ALT）から新 ALT のことを聞き出す。 ○ウェルカムパーティーに必要なものを考え、ALT への質問を考える。 ●パフォーマンステスト（第9時） ○聞いた情報をもとに、ウェルカムパーティーの最終準備を計画する。 ●単元テスト ●単元の学習・自己目標の達成状況を振り返る。	指導②> ・教科書 校長先生の情報をたくさん聞き出すために、既習の様々な表現を駆使し、個人やグループで質問の表現を考えさせる。 記録②> ・観察 （response） 新しいALTのウェルカムパーティーを計画するために、電話を使用し、マーク先生から必要な情報を聞き出すことができていた。 記録③> ・観察 （attitude） 新しいALTのウェルカムパーティーを計画するために、電話を使用し、マーク先生から必要な情報を聞き出すことができていた。	指導③> ・教科書 校長先生の情報をたくさん聞き出すために、既習の様々な表現を駆使し、個人やグループで質問の表現を考えさせる。 記録④> ・観察 （response） 新しいALTのウェルカムパーティーを計画するために、電話を使用し、マーク先生から必要な情報を聞き出すことができていた。 記録⑤> ・観察 （attitude） 新しいALTのウェルカムパーティーを計画するために、電話を使用し、マーク先生から必要な情報を聞き出すことができていた。
---	--	--

7 時間目に電話表現を練習し、8 時間目には、次時に向けてのプレを行った。努力を要する生徒には、適切に手立てを講じ、9 時間目の電話によるパフォーマンステストにつなげた。9 時間目は、前時や単元を通しての言語活動で培った表現力を駆使し、生徒は必要な情報を聞き出すことができた。また、学習活動をまとまりごとに設定したことにより、目的に応じた無理のない評価計画を実行することができた。

◆「手立て」の視点での実践例

※中学校第3学年 数学科「I 章 式の計算」 第三章 研究員の授業実践 pp. 15～31

【単元の指導計画】

主な学習活動	評価方法及び学習上の留意点
1 ①カレンダーの4つの数字の和について、文字を用いて一般化して表現しようとしている。	記録①>
②問題を把握する。	・観察
③問題を把握する。	・観察
④問題を把握する。	・観察
⑤問題を把握する。	・観察
⑥問題を把握する。	・観察
⑦問題を把握する。	・観察
⑧問題を把握する。	・観察
⑨問題を把握する。	・観察
⑩問題を把握する。	・観察
⑪問題を把握する。	・観察
⑫問題を把握する。	・観察
⑬問題を把握する。	・観察
⑭問題を把握する。	・観察
⑮問題を把握する。	・観察
⑯問題を把握する。	・観察
⑰問題を把握する。	・観察
⑱問題を把握する。	・観察
⑲問題を把握する。	・観察
⑳問題を把握する。	・観察
㉑問題を把握する。	・観察
㉒問題を把握する。	・観察
㉓問題を把握する。	・観察
㉔問題を把握する。	・観察
㉕問題を把握する。	・観察
㉖問題を把握する。	・観察
㉗問題を把握する。	・観察
㉘問題を把握する。	・観察
㉙問題を把握する。	・観察
㉚問題を把握する。	・観察
㉛問題を把握する。	・観察
㉜問題を把握する。	・観察
㉝問題を把握する。	・観察
㉞問題を把握する。	・観察
㉟問題を把握する。	・観察
㊱問題を把握する。	・観察
㊲問題を把握する。	・観察
㊳問題を把握する。	・観察
㊴問題を把握する。	・観察
㊵問題を把握する。	・観察
㊶問題を把握する。	・観察
㊷問題を把握する。	・観察
㊸問題を把握する。	・観察
㊹問題を把握する。	・観察
㊺問題を把握する。	・観察
㊻問題を把握する。	・観察
㊼問題を把握する。	・観察
㊽問題を把握する。	・観察
㊾問題を把握する。	・観察
㊿問題を把握する。	・観察

単元の指導計画を作成する際に、各時間の目標達成に向けて必要となるであろう手立てを記述した。実際に授業を行い、指導に生かす評価をしていくことで、次時以降の手立てを必要に応じて変えながら進めることができた。

【本時の展開】

本時の目標を達成させるために、つまり
きが予想される場面での手立てを具体的
に記述した。この手立ては前時までの指
導に生かす評価から考えていく。

「AとBの面積が等しくなるときがありま す。1辺何mのときでしょうか。」 練習問題 正方形AとAの縦を伸ばし、伸ばした分と同 じ長さ横を伸ばした長方形Bがある。正方形は 長方形よりどれだけ大きくなりますか？ 正方形 長方形	【支援3】 ・xの値が6のとき、$6-6=0$で同じになる。 ・xの値が6より大きいとき、$x-6$は正の数と なりBの方が大きい。 ・xの値が6より小さいとき、$x-6$は負の数と なりBの方が小さい。 【支援4】 ・（正方形の面積）$=x \times x = x^2$ ・（長方形の面積）$= (x+y)(x-y) = x^2 - y^2$
---	--

単元、本時の目標を明確にすることで、その達成に向けた手立てを毎時間行っていくことができた。指導に生かす評価も次時以降の手立てを考えていく上で非常に有効であった。生徒の実態に合わせて学習を展開し、必要な生徒に効果的に手立てを講じることができたので、生徒は学習内容をより深く理解することができた。

観点ごとの総括とは、目標を達成した児童生徒の具体的な姿を想定し、表出した成果物を適切に見取り、評価することである。

見取り方

「知識・技能」の評価は、各教科等における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価を行う。また、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについて評価するものである。

「思考・判断・表現」の評価は、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかを評価するものである。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど、性格や行動面の傾向を評価するということではない。各教科等の趣旨に照らして、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要であり、以下の2点の側面において評価するものである。

- ①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面
- ②粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面

判断

評価を行う際には、教科の特性、本時のねらい、学習内容等に応じて、妥当性と信頼性を高めるよう留意する必要がある。

そのため、本研究では、学習活動における具体の評価規準から目標に達成したと判断する具体的な姿を想定し、評価の妥当性を高め、適切な評価を行えるようにした。

特に、「思考力・判断力・表現力等」の評価においては、各教科の内容に即して思考・判断したことについて評価することである。評価に当たっては、単に児童生徒の正答率を見て評価するのではなく、自分の考えを記述させたり、発表させたりして、児童生徒の思考したことを見取ることが必要である。その際、児童生徒がどのようなことを発言、記述できれば目標を達成したかと言えるのかという具体的な姿を想定しておくことが大切である。

これらを踏まえた上で、評価の場面と方法を学習指導案に位置付けることが、教科の特性、本時のねらい、学習内容等に応じて目標を確実に達成させることに結び付く。

第Ⅲ章 研究員の授業実践

○鷹栖町立鷹栖中学校 第3学年 数学科
授業者 村 越 恵 一 研究員

○旭川市立永山西小学校 第3学年 国語科
授業者 小 林 豊 研究員